

心ひとつに

弥富市立桜小学校
学校だより
No.15
平成26年10月29日

「愛されている子は、人を愛することができる」

—子育てと家庭教育—

10月28日(火)、弥富市小中学校PTA連絡協議会の秋季研修会が行われ、講師に子ども教育ひろば代表、前大阪教育大学監事 **野口 克海先生**をお招きして上記の演題でご講演をしていただきました。

野口先生は、アメリカの発達心理学者エリクソンの発達理論とご自身の豊かな見識・経験・実践に基づきながら、とても分かりやすく、ユーモアも交え、しかも心に響くお話をしてくださいました。会場の皆様は、野口先生のお話にごっと引きつけられていったのではないかと思います。

【長い目でみた子育て】

乳児期	幼児期	学童期	思春期
0才	1.5才	6才	10才
安定根	しつけ	自己肯定感	同行二人

野口先生は、エリクソンの発達表を基に、上記の「長い目でみた子育て」という表に従って、それぞれの時期で子育てにとって大切なポイントをお話くださいました。

- 乳児期は、「愛のシャワー」をいっぱい感じ、周りの大人に対する信頼感をもてること、安定根がしっかりしていることが大切である。
- 幼児期前期は、しつけの時期。しつけの基本はあいさつ。しつけは、し続けることが肝要。これは、家庭教育の仕事である。
- 幼児期後期は、親離れの時期。「やっごらん」と、口に出してもいいけど、手は出さない。
- 学童期は、学ぶ喜びを感じる時期。自己肯定感をしっかりもたせることが肝要。自己肯定感を育むには、「自信をもたせる」ことが肝要。「必要とされている、頼りにされている」と実感させることが肝要。
- 「愛しているよ」「大好きだよ」と伝えることで、子どもの頑張るエネルギーが生まれる。
- 思春期は、頭ごなしに言うのはいけない。「同行二人」とは、お遍路などの巡礼、霊場巡りにおいて、常に自分には弘法大師がついていてくれる、弘法大師が共にいてくれるという意味で書かれる言葉だそうです。
思春期の子どもたちには、同じ道で頑張ろうと寄り添い、見守ることが肝要。

なお、「よい子を育てる7か条」というプリントもいただきましたので、ご一読いただければ幸いです。

「とある小学校5年生担任の話」

この講演の冒頭7分間で、「とある小学校5年生担任の話」という実話を綴ったDVDを視聴しました。これは、初めて担任を受け持ったある小学校の女性教員が、授業妨害をしたり、雰囲気をかき乱す少年の指導に手を焼くのですが、ある日を境に毎日、放課後教室で勉強をみるようになってから、問題を抱えた少年が大きく変化していった実話です。

この先生の優しさ・愛情を、亡き母親の愛情のように感じ、勉学に励み、奨学金をもらって医学生となり、ついには医者となって社会に出ます。

その時の手紙には、「僕は、今でも先生を思い出します。あのままだめになっとう僕に、優しく手を差し伸べてくれた先生を神様のように感じます。僕は、先生のように人に命を与えられる人になります」と、思いやりのある医者になる決心が書かれていました。

また、結婚式の招待状には、「先生、僕の母の席に座ってくださいますか」と綴られていました。

この実話の語りを市P連母親代表の北村 夏江さんに、講演開始直前にお願いしました。北村さんの感情豊かな見事な語りは、会場の皆様をその実話の世界に引き込み、共感させてくれました。涙もろい私は、思わず目頭が熱くなり、感動の涙が流れ出てしまいました。

「愛されている子は 人を愛することができる」肝に銘じていきたいものです。